

古代の国道

大宰府への道

石体事件

12世紀前半の平安時代、大宰府から朝廷に急使が派遣されました。それは大隅国の大隅正八幡宮（今の鹿児島神宮）の東約三〇〇メートル、宮坂麓で石が割れ「八幡」という文字が現れたので、真偽を確かめてほしいというものです。宮坂麓には石体神社があり、鹿児島神宮が最初に建てられた場所といわれています。この事件について、鹿児島大学の日隈正守氏は次のように述べています。「藤原忠実が白河法皇亡き後、謹慎が解け、再び政界に戻って、島津荘の勢力が拡大し始めるころ、宮坂の麓で八幡という二字を刻んだ石体が現れた。このことがまず大隅国司に連絡が行き、以下、大宰府そして朝廷に知らされた。この現象はいったい何を意味するのかということ、朝廷は清原氏を派遣し調べた。その結果、崇徳天皇に王子が生まれる瑞兆ではないかと

解釈したようで、それが回りまわって、今では安産の神様の石体神社ということになっている。この事件の背景には日本最大の荘園といわれる島津荘の拡大とそれを防ごうとする大隅国府・大隅正八幡宮の連合軍の対立と中央権

力の動きがあるようです。注目されるのは、その記録に書かれた「往古大路」という部分（棒線）です。それに初めて気づいた古代交通研究会の平田信芳氏は、大路が古代官道ではないかと考えました。古代官道は、国府（県庁に相当）と国府を最短距離で結ぶ、今の国道や高速道路に相当します。幅は、九メートル以上で、国によって違いました。宮坂麓の大路は溝辺方面に向かう大宰府へのバイパスと考えられています。宮坂麓から志学館大学付近までは険しい急坂で、今では敷かれています。教育委員会で調査したところ、立派な石垣や石段が残って

おり、城門のような切り通しもありました。この道は溝辺町の十三塚原に出て北の大口方面に延びていきます。

十三塚の伝説

鹿児島空港一帯の台地は十三塚原と呼ばれます。その名の由来が伝えられています。

「昔、大分県の宇佐神宮と大隅正八幡宮が本家争いをした時、宇佐から14人（『三国名勝図会』では3人）の神官が来て、芋莖を使って大隅正八幡宮を焼いた。ところが、その炎は天をおおい、もうもうたる煙の中に『正八幡』の文字が現れた。恐れおののいた神官たちは逃げ帰ったが、途中この場所ですべて13人が倒れ、ようやく一人が宇佐に帰り着き報告した。このとき死んだ13人を埋葬した場所が十三塚原と呼ばれるようになった。溝辺町の高速道路の近くに十三塚史跡公園があり、十三個の石が一列に並んでいます。元々は三十メートル間隔にあつたそうです。

宇佐の人たちが逃げる際に通つたと思われるのが、この記録にある大路と考えられています。十三塚史跡公園の近くには「大道」「大道添」などの小字が残っていることも大宰府へのバイパス説の傍証となっています。

（文責 重）

城門のような切り通し



天承二(一二三二)年

『石清水文書』
 大隅国司解案 天承二年四月廿五日
 大隅正八幡宮様送御石体式基子細状
 官上 八幡正宮様送御石体式基子細状
 副進彼宮様一通
 右今月廿三日宮様 同日到来云々者 仰御石体可奉拝見之由 雖被
 謹送 依不能因司之通止 所言上也 具見宮様状者 勸在状 以解
 天承二年四月廿五日 正六位上行日 酒井忠末
 從五位下行守 正六位上行大掾 藤原輔末
 中原朝臣信俊 正六位上行大掾 建部清定
 大宰府在任官人等解案 府政事
 大宰府在任官人等解案 府政事
 言上大隅国司官上 八幡正宮御殿丑寅方三町許 於往古大路字宮坂
 麓頭現八幡御名二字御石体式基 奇特由状